

論 説

マルクス主義から新自由主義へ
—マリオ・バルガス＝リョサの軌跡—

立 林 良 一

目 次

はじめに

I. 1960年代—キューバ革命への共感

II. 1970年代—社会主義との訣別

III. 1980年代—新自由主義へ

IV. 1990年代—大統領選以降

おわりに

は じ め に

1936年にペルーで生まれたマリオ・バルガス＝リョサは、1960年代に起きた世界的なラテンアメリカ文学〈ブーム〉を代表する小説家の1人で、日本においても主要作品の多くが翻訳され、愛読者も少なくない。しかし、彼の名前がより広く一般の日本人の目に触れたのは1990年の大統領選挙においてであった。終始選挙戦をリードし、誰もがバルガス＝リョサの勝利を間違いのないものと考えていた中で、最終盤になって多くの泡沫候補の中から日系2世のアルベルト・フジモリが急速に支持率を伸ばし始めたとき、遠い南米の国の選挙が俄に日本のマスコミの注目を集めることとなった。結局第1次選挙で2番手につけたフジモリが決戦投票で逆転勝利をおさめ、その後2期10年にわたって大統領の地位にあったことは、まだ我々の記憶に新しい。

1959年に起きたフィデル・カストロによるキューバ革命の圧倒的な影響の下で作家活動を開始したバルガス＝リョサは、かなり早い段階で反カストロの姿勢に転じ、新自由主義に立脚した財政再建策を打ち出して大統領選に立候補することになる。本稿では、そうした彼の政治的立場の変遷を、文学作品に表れた変化と結び付けながら考察していくことにする。

昨2006年7月、80歳の誕生日を目前に腸の緊急手術のため入院したフィデル・カストロは、それ以後政治の表舞台から姿を消し、半世紀近く続いたカストロ政権の終焉がいよいよ現実のものとなりつつある。1991年のソ連解体以後も頑に社会主義体制を守り続けてきたキューバの動向に対する関心は、アメリカはもちろん、日本においてもきわめて高い。またその一方で、冷戦構造が解消したことによって、アメリカ極中心のグローバル化が、政治、経済、文化などあらゆる分野で急速に進展する中、ベネズエラのチャベス政権を始め、南米では近年、次々に反米左翼政権が誕生している。バルガス＝リョサという作家の半生を振り返ったとき、ラテ

ンアメリカを取り巻くこうした今日的状況の問題点も浮かび上がってくるであろう。

I. 1960 年代—キューバ革命への共感

マリオ・バルガス＝リョサは 1936 年にペルー南部の都市アレキパで生まれたが、間もなく父親が妻子を残して出奔してしまったため、幼少期を母方の祖父母一家の下で送っている。祖父は時の大統領と縁戚関係にあり、ペルー北部の都市ピウラの知事に任命されるような社会階層の人間であった。彼が 10 歳を過ぎてから父親と母親が和解し、再び親子 3 人での生活が始まったが、それまで死んだと聞かされていた父親との間に生じた軋轢は、彼の最初の長編小説『都会と犬ども (La ciudad y los perros)』の中に読み取ることができる。父親の意向で軍が運営する全寮制の中等学校レオンシオ・ブラド学院に入学したものの、文学少年として育った彼は、軍人養成を目的とした少年院のような殺伐とした学校に遂に馴染むことができなかつた。しかし、この学校で様々な出身地、社会階層、人種の生徒たちや、教官たる軍人たちと接する機会を得たことは、上流階級の生活しか知らない彼にとって、祖国の真の姿を知る上で大変重要であった。

1953 年に国立サン・マルコス大学に入学すると、1948 年のクーデターで実権を握ったオドリア將軍の軍事独裁政権打倒を目指す学生運動にも積極的に関わっていった。上流階級の師弟が集まる私立のカトリック大学とは対照的に、この国立大学では政治意識の強い、左派思想の学生が多数を占めており、サルトルの文学作品への傾倒から、そのマルクス主義的政治思想にも共鳴していたバルガス＝リョサにとって、彼らと行動を共にするのは当然の成り行きであった¹⁾。

1958 年に文学部を卒業すると、奨学金を得てスペインのマドリード大学大学院へ留学し、その地で翌年 1 月に起きたキューバ革命の報に接することになる。当初フィデル・カストロとチェ・ゲバラを中心に、ごく僅かな人数で始められたゲリラ戦が、次第に民衆の力を結集し、ついにはアメリカを後ろ楯とするバティスタ独裁政権の打倒を成しえたという事実は、同様な変革を切望する彼のようなラテンアメリカ人に大きな衝撃と勇気を与えた。キューバ革命は目指すべき目標となったのである。

1 年のスペイン留学の後、新たな奨学金を当てにしてパリに移り住んだものの、結局奨学金は得られず、当地で放送局の海外部門に仕事を得て、働きながら小説の習作を続けることになった。そうしたさなか、1962 年にスペインの大手出版社が主宰する〈ブレーベ図書賞〉に応募した長編小説『都会と犬ども』が、全審査委員の圧倒的支持を得て最優秀作に選ばれ、新進作家として一躍注目を集めることになったのである。彼が実際に通ったレオンシオ・ブラド学院を舞台にしたこの物語が高い評価を得た大きな要因は、軍事演習中に起きた 1 人の生徒の死をめぐってサスペンス的に展開していくストーリーの面白さが、腐敗した軍部に対する批判と

いう主題と見事に融合している点で、それを可能にした巧みなプロットの構成と、それを支える多様な文体の利用は、この作品が無名の新人によって書かれた処女長編とはにわかには信じがたい水準に達していた。

学生時代から小説家を目指して習作を続けていた彼が、とりわけ影響を受けたのは、当時世界的に持てはやされていたサルトルの文学であった。この哲学者が1945年に創刊した月刊誌「レ・タン・モデルヌ」の創刊号巻頭に掲げられた「創刊の辞」によって文学の社会的使命を確信した彼は、これを座右の銘として、諳ずるほど繰り返し読んだと語っている（*Literatura y política*, pp.45-46）。時代の状況の中に巻き込まれた作家として、時代に対する責任を引き受けんとする「アンガジュマン」の決意、状況を開示することを通して社会変革の力を発揮する小説の役割を、彼に教えられたのである。またサルトルの小説作品を読むことで、重層的視点からの語り、時間、空間の多様なレベルといった新しい語りの技法を学び取っていった。

『都会と犬ども』は、文学について師から学んだ思想と技の見事な実践といってよい。物語の舞台となる全寮制の男子中等学校には、都会出身の白人、アンデスの山村出身のインディオ、あるいはメスティソ、黒人と、当時の実際の社会ではほとんど交わる機会がなかった多様な生徒たちが集まって、ペルー社会の縮図ともいべきマイクロコスモスを形成している。表面的な規律の裏側に蔓延する生徒たちの不正、弱肉強食のマチスモの原理が支配する人間関係なども、独裁下にある当時の社会の忠実な反映に他ならない。この作品は卓抜な舞台設定と、複線的に物語を展開させる語りの重層性によって、軍事独裁政権下にあった1950年代のペルー社会と、そこに生きる人々の姿を全体的に浮かび上がらせることに成功している。

こうして作家デビューを果たし、60年代に起きたラテンアメリカ文学（ブーム）の中心の1人となっていくバルガス＝リョサは、1964年の夏、「ル・モンド」紙に掲載されたサルトルの言葉を読んで愕然とする。そこには、現実に対する文学の無力、文学という贅沢が許される社会を実現するため、発展途上国の知識人は創作活動よりもまず先に、祖国においてもっと直接的な行動をとるべきである、といったことが語られていたのである。「アンガジュマン」の思想に導かれて作家となり、自主的亡命生活を続けながら創作に取り組んできた彼にとって、それは自らの存在を否定されたに等しかった。だが、師に裏切られたという悲しみ、失望を感じながらも、文学が有する力への確信が揺らぐことはなかったし、その気持ちは今も変わっていない（*ibid.* p.49）。

1966年に発表された2作目の長編小説『緑の家（*La casa verde*）』は、アマゾン川上流の密林地帯と、太平洋に面した街ピウラという、アンデス山脈をはさんで地理的に隔絶した2つの地を舞台に、石器時代から現代に至る多様な歴史的発展段階を同時に抱え込んだペルーの複雑な現実を、ひとつの作品の中に描き出そうとした壮大なスケールの物語で、全体性の志向はここでも明白である。ブラジルからやって来てインディオ部族のボスにのし上がっていく日系人

フシーアの波瀾の半生、砂漠によって外界から遮断されたピウラの街に流れ着き、そこに歡樂の不夜城たる「緑の家」を建設するアンセルモをめぐる神話的物語、密林の伝道所でカトリックのシスターに育てられたインディオの娘ボニファシアと、彼女を妻とするピウラ出身の軍曹の挿話など、いくつもの物語を同時進行させながら、ひとつの大きな世界を浮かび上がらせていくバルガス＝リョサの構成力は驚くべきものである。密林で暮らす未開先住民は現代文明とどのように共存していくべきなのか。無理やり親から引き離され、シスターによって文明人としての教育を受けたインディオの子供たちを待ち受けている皮肉な運命などを通し、異なる文化・価値観の出会いと、そこから引き起こされる葛藤が、この作品において様々な形で描かれている。

新進作家として第 2 作が注目されていたバルガス＝リョサは、読者の期待を裏切らなかつたばかりか、1967 年にはベネズエラの「ロムロ・ガリエゴス賞」の第 1 回受賞者にも選ばれ、作家として地位を不動のものとするようになった。この授賞式の記念スピーチの中で彼は、「文学は熱い火だ。そのことを警告しておかなければならない。文学は不満と謀叛を意味する。そして作家の存在理由は反対と批判にこそあるのだ」(*Contra viento y marea I*, p.176) と述べ、作家の社会的使命を高らかに宣言している。サルトルが、ド・ゴール大統領による第 5 共和制成立以降、小説の創作から距離を置くようになっていったのとは対照的で、これを見ても、かつての文学の師の影響圏から抜け出し、独自の文学観を確立していると感じられる。

さらに 3 年後の 1969 年に長編第 3 作として発表されたのが『ラ・カテドラルでの対話 (*La conversación en la Catedral*)』である。1948 年から 8 年間続いたオドリアによる軍事独裁の時代を描いたこの小説は、独裁者個人よりも、腐敗した社会全体の状況を大きくとらえることを意図している。上流階級の出身ながら社会の不平等に強い問題意識を持つ、作者の分身ともいえるべき若きサンティアゴと、独裁者の右腕として政権維持に辣腕を振るうカジョ・ベルムーデスを中心に、権力の中枢から社会の底辺に至る数多くの登場人物が絡み合っており、ひとつの大きな物語が浮かび上がってくる。時と場所を異にする多数の会話を交錯させることによって重層的に描き出されたこの作品は、まさに全体小説と呼ぶに相応しいスケールを備えている。人は日常生活を送っている限り、自分が置かれている社会的状況をなかなか大局的に捉えることはできない。しかし、小説に描かれた虚構の中であれば、読者は社会全体の大きな動きを見渡すことが可能になる。60 年代の 3 つの長編小説には一貫して、文学の持つそうした機能への積極的評価が反映しており、『ラ・カテドラルでの対話』は、全体性の追求を最大限にまで押し進めた作品といえることができる。

II. 1970 年代—社会主義との訣別

バルガス＝リョサは 1960 年代を通して意欲的な長編小説をコンスタントに発表すると同時

に、キューバのカストロ政権を全面的に支持する立場からの政治的な発言も繰り返し公にしてきた。1965年にペルーで左翼革命運動がゲリラ戦を開始したときも、これを支持する声明を連名で発表している (*ibid.* pp.91-92)。そうした政治姿勢の根底には、キューバはソ連におけるような言論に対する検閲、弾圧とは無縁であり、そこでは言論、創造の自由と両立する新しい社会主義が育っているとの期待があった。しかしそうした思いは、1968年にソ連が武力によってチェコスロヴァキアの民主化運動を弾圧し、カストロがそれを条件付きながら支持した頃から揺らぎ始める。そして1971年のパディーリャ事件によって、その思いは確信へと変わった。この年パディーリャを始めとする5名のキューバの詩人、作家たちが反革命を煽動するような作品を発表したとして、反乱活動の容疑で逮捕され自己批判を強要されると、彼はサルトルを含む各国の文学者60人と共にカストロ政権に抗議声明を出したのである (*ibid.* pp.250-252)。そして数年来編集委員として関わってきた同国の文化・文芸誌「カサ・デ・ラス・アメリカス」の編集局に辞任を伝え、キューバ訪問の予定もキャンセルした。

あるひとつの理想社会をゴールとして設定し、ひたすらそれに向かって突き進もうとする行き方は、しばしば、異なる価値観の存在を一切許容しない狂信性に結びつく。バルガス＝リョサは1998年に大江健三郎と交わした公開往復書簡の中で、「カストロの独裁政権は、40年になる容赦のない専制の歴史を刻もうとしています」と述べ、彼を躊躇なく独裁者と断罪している。「私は、完全なる社会を若いころに夢見たあと、殺戮を引き起しながら到達不可能なユートピアを求めるより、文明の存続のためには、民主主義によるうんざりするほどゆっくりした発展を求めたほうがましだと、30年前に確信しました」（大江健三郎, pp.107-108）という言葉からは、パディーリャ事件の頃に、革命という暴力を肯定していたかつての自分を完全に否定するに至ったことが読み取れる。こうして彼は、集団の理想を実現しようとする「積極的」自由よりも、個々人の違いを尊重する「消極的」自由の側につき、政治的良識を重んじるカミュへの共感を深めていく。それは言葉を変えれば、アイザヤ・バーリンが分類するところの「求心的ビジョン」の側に立つ針鼠ではなく、「遠心的ビジョン」の側の狐的人間であることを選んだということである (*Contra viento y marea II*, pp.271-274)。

こうした政治姿勢の大転換は、小説作品にも明らかな影響を及ぼしている。1973年に発表された『パンタレオン大尉と女たち (*Pantaleón y las visitadoras*)』は、軍部の批判という点においては『都会と犬ども』と共通したテーマを扱っているが、作品のトーンの違いは同一の作者のものとは思えないほど大きい。国境警備隊の兵士たちが、突如性欲に異常をきたし軍務に専念できなくなってしまうという設定がまず意表をつくし、特別任務を命じられた模範的軍人であるパンタレオン大尉が、事態收拾のためにコールガールをリクルートして秘密部隊を編成するという展開も荒唐無稽である。生真面目な大尉が夜の女たちと繰り広げるとどたばた騒ぎ、軍の機密文書という堅苦しい形式とポルノまがいの報告内容との落差など、この長編小説は読者

を笑いに誘う仕掛けであふれている。

創作活動におけるこうした新展開が、キューバ革命というユートピア思想の呪縛から解放されたことと密接に関係しているのは間違いない。革命によるドラスティックな変革以外の道を一顧だにしていなかったかつての自分の姿を、愚直に軍務に邁進するパンタレオンに重ね合わせ、硬直した価値観に囚われることの危険性と滑稽さを、笑いを通して浮き彫りにしている。多様な価値観の存在を前提とする民主主義の優位を確信したことが、過去の自分を批判的に振り返る精神的余裕を生み、それが小説の中にも笑いという形で現れたと考えられるのである。

こうした新傾向は 1977 年の『フリアとシナリオライター (Tía Julia y el escribidor)』にも引き継がれていく。バルガス＝リョサは学生時代に周囲の猛反対を押し切って、10 以上も年上のフリアと結婚したのであるが、この小説は、作者にきわめて近い「僕」の結婚をめぐる物語を縦糸とし、ラジオドラマの台本作家であるペドロ・カマーチョのエピソードが横糸としてそこに絡んでくる。読者の意表をつくのは、自伝的物語が語られる偶数章と交互して、それとは全く異質なカマーチョのラジオドラマが奇数章で語られている点であるが、フリアとの結婚を実現しようとして「僕」が繰り広げる大騒動も、章を追うごとに通俗的ラジオドラマの様相を帯びていく。数年後に破局を迎えた現実の結婚生活を作品の素材とした背景には、前作同様、自分自身を客観視し、笑いのめすだけの精神的余裕を得たことが大きく作用していると考えられる。

またこの作品において初めて、虚構たる物語を書くという行為そのものがテーマとして取り上げられたことも注目に値する。彼は 1971 年に発表された浩瀚な文学論『ガルシア＝マルケス／ある神殺しの歴史 (García Márquez: Historia de un deicidio)』において次のように述べている。「小説を書くということは、現実に対する、神に対する、神の被造物としての現実に対する逆行行為である。それはありのままの現実を修正し、変更し、あるいは廃棄し、小説家の創造する虚構された現実によって置き換えようとする試みなのである。小説家とは異説を唱える者であり、あるがままの（あるいはあるがままと彼が信じているところの）生と世界を受け入れられないからこそ、言語による世界と架空の生を作り出すのである。小説家になることを選択した根底にあるのは、生に対する不満感であり、小説というのはどれも密かな神殺し、象徴としての現実の殺害に他ならない。」(p.85) これを読むと、かつてサルトルの強い影響のもと、「社会変革の力を発揮する小説の役割」という考えから出発した彼が、人間の生において言葉が果している、より根源的な働きに対して認識を深めつつあることが理解される。『フリアとシナリオライター』は、言葉によって虚構の現実を創造するという行為そのものをテーマのひとつとしている点で、メタフィクション性を備えているということが出来るが、そうしたテーマは、1984 年の『マイタの物語 (Historia de Mayta)』や、同じく 80 年代に発表された 3 つの戯曲作品において、一層掘り下げられていくことになる²⁾。

あるひとつの価値観を絶対視するユートピア思想は、人類の歴史において繰り返し途方もない悲劇を生み出してきた。1981年の『世界終末戦争 (La guerra del fin del mundo)』でバルガス＝リョサが描いたブラジルの「カヌードスの乱」も、まさにそうした歴史的事件の1つであった。これは19世紀末にブラジル北東部の奥地で、コンセレイロという教祖のもとに集まった数万もの信者たちが、ときの共和制政府との間に引き起こした大規模な宗教戦争で、『世界終末戦争』は、19世紀末の変革の時代に様々な価値観がぶつかり合い、対立をエスカレートさせていく様を、多様な登場人物の視点から重層的に描き出している。そこから浮かび上がってくるのは、自分の正しさを確信し、相手を理解しようとしないうる狭隘な価値観に縛られることの愚かさには他ならない。

Ⅲ. 1980年代—新自由主義へ

バルガス＝リョサが西欧型民主主義に強く引かれていった1970年代、祖国ペルーでも大きな変革が進みつつあった。1968年にクーデターによって政権の座に就いたベラスコは軍事政権主導で農地改革や産業の国有化を断行し、「完全参加の社会的民主主義」の建設を進めようとしたのだ。「ペルー革命」とも呼ばれた諸改革は、キューバ革命に次ぐほど大規模なものであったが、結局その恩恵は社会の過半数を占める下層の貧しい人々に及ぶことはなかった。むしろ経済状況は、第1次オイルショックによる世界的不況の影響を受けて悪化の一途をたどり、国民の不満は高まっていったのである。1975年には軍事政権内部でクーデターが起き、モラレスが大統領に就任するが、やはり経済の安定化に有効な手を打てないまま、民政移管の承認へと追い込まれた。1979年に新憲法が制定され、翌年大統領、国会議院選挙が実施されると、12年に及んだ軍政は幕を閉じた。

民主化後最初の大統領に選ばれたベラウンデの時代、第2次オイルショックやメキシコの債務危機の影響がペルーにも及び、経済はマイナス成長に陥り、インフレ率は3桁に達したが、政権が中長期的な具体的経済発展策を打ち出すことはなかった。1985年にそうした経済的混乱を引き継いだガルシア政権は、IMFを始めとする国際金融機関から示された財政均衡の処方箋を受け入れず、対外債務の支払いを一時的に制限したことで国際的な孤立を招くことになった。人気を維持するために補助金ばら撒きの政策を続けた挙げ句、外貨準備は払底し、政権末期にはインフレ率が7650パーセントにまで達する危機的状況に陥った（村上勇介, pp.73-77, pp.111-116）。

バルガス＝リョサは「ペルー革命」が進行中の1974年、16年の長きにわたった自主的亡命生活に終止符を打ち、再び祖国に生活の拠点を戻した。1976年には40歳の若さで国際ペンクラブの会長に選出され、世界の文学者の代表として、言論や人権の抑圧を批判する政治的発言も一層活発になっていった³⁾。

こうした中、1984年にはベラウンデ大統領から内閣首相就任の要請を受けたが、あくまでも自分の天職は作家であるという、政治に直接関わることをこのときは辞退した。しかし、次のガルシア大統領が1987年に、突然銀行国有化を発表すると、そうした社会主義的方策に強い危機感を覚え、率先してこれに反対する運動の先頭に立つことになる。ベラスコによる「ペルー革命」が失敗に終わったのは、産業の国有化が結果として国際的競争力を失わせ、公務員の数の増大が国家財政の悪化につながったからであった。これは、同じ軍事独裁政権でありながら、隣国チリのピノチェトが市場原理に基づく自由主義経済の導入によって、経済発展の面では一定の成果をあげていたのと対照的であった。民主化以降も国営企業の民営化が進まず、公務員の数がむしろ増加している状況を問題視していたバルガス＝リョサにとって、銀行国有化はあり得ない選択肢だったのである。

彼の主張は富裕層、中間層に支持されたばかりか、貧困層の間にも予想外に支持の広がりを見せた。そうした状況を受け、彼は銀行国有化反対運動を、市場原理に基づく自由主義的発展を目指す「自由運動 (Movimiento Libertad)」へと発展させ、政治活動を本格化させた。そして1990年の大統領選挙を視野に、1988年に保守系の人民行動党、キリスト教人民党との連合で「民主戦線 (Frente Democrático)」を結成すると、その圧倒的知名度によって大統領選候補に祭り上げられたのである。このときは危機的状況に陥った祖国に対する使命感から、天職を投げうって、あえて火中の栗を拾う決心をしたのであった。既成政党に属さない彼の率直な訴えは広範な国民の支持を集め、選挙直前まで他の候補を寄せつけることなく、終始優位に選挙戦を進めた。

誰もがバルガス＝リョサの当選を疑わない中、選挙戦の最終盤になって急速に支持率を上昇させ2番手につけたのが、それまで政治的には全く無名だった、国立農科大学長アルベルト・フジモリであった。バルガス＝リョサは経済危機打開のため、公共料金の改定、貿易の自由化、国際金融機関との協調などを柱としたショック療法が不可欠であり、2年間程度は厳しい不況に耐える覚悟をしてもらいたいと、率直に国民に訴えていた。それに対しフジモリは、そうした政策を弱者切り捨てと厳しく批判し、「勤労、誠実、技術」をスローガンに、日系であることを全面に押し出して、特に下層の貧しい人々の間に支持を伸ばしていったのである。結局バルガス＝リョサの得票は30パーセントにも届かないという予想外な結果となり、2カ月後の決戦投票において、2番手のフジモリに逆転を許すことになった。幸か不幸か彼は天職を手放さずに済んだのである。

選挙運動中はバルガス＝リョサの「ショック療法」を真っ向から否定していたフジモリであったが、経済安定に向けて国際金融機関からの支援を得るためには、そうした機関が示す政策を実施することが避けられず、「フジ・ショック」と呼ばれる大胆な緊急措置を断行した。明らかな公約違反であったが、国民の間に大きな反発が生じなかったのは、古い政治権力との結び

つきを持たないフジモリのクリーンなイメージによるところが大きかった⁴⁾。結果としてバルガス＝リョサは投票では敗北したが、その訴えの正当性においては勝利を手にしたのである。

祖国への帰還を果たして以降、大統領選挙に巻き込まれるまで、先に挙げた『フリアとシナリオライター』、『世界終末戦争』、『マイタの物語』と、意欲的な作品がコンスタントに上梓され、この頃からノーベル文学賞の候補としても、その名が常に取り沙汰されるようになっていった。1986年には推理小説の形式を借りながら、社会格差、人種的偏見、軍部の腐敗といった問題を扱った『誰がパロミーノ・モレロを殺したのか (¿Quién mató a Palomino Molero?)』、1987年にはペルーの先住民マチゲンガ族の語り部を素材に、異文化理解の可能性と「物語る」という行為の根源的意味を追求した『密林の語り部 (El hablador)』、そして1988年には『継母礼讃 (Elogio de la madrastra)』という、エロティシズムを主題とした、まったく新しい傾向の作品にも作風を広げ、作家としての円熟を印象づけた。

IV. 1990年代一大統領選以降

大統領選に破れたバルガス＝リョサは再び祖国を離れ、ヨーロッパに拠点をおいて執筆活動を再開すると、1993年には、大統領選を回顧した『水を得た魚 (El pez en el agua)』を出版した。書名からも、彼が作家を天職と考え、大統領の座に些かの未練も残していないことが伝わってくる。これと同じ年ペルー国籍を保持したままスペイン国籍を取得すると、荣誉あるスペイン王立言語アカデミーにも会員として迎えられ、翌1994年には、それまでの作家活動全般に対して、スペイン語圏ではノーベル文学賞に匹敵する権威を有するセルバンテス賞が授与された。

『水を得た魚』と同年、反政府ゲリラ「輝ける道」によるテロ事件が頻発した1980年代を背景にした、推理小説仕立ての『アンデスのリトゥーマ (Lituma en los Andes)』という長編も出版され、新作を心待ちにしていた世界中の読者を喜ばせた。これを皮切りに、1997年には『継母礼讃』の続編となる『官能の夢—ドン・リゴベルトの手帖 (Los cuadernos de don Rigoberto)』、2000年にドミニカのトルヒーリョによる独裁を描いた歴史小説『山羊の宴 (La fiesta del Chivo)』、そして2003年にはフランス印象派の画家ゴーギャンと、その祖母フローラ・トリスタンの波瀾の生涯を取り上げた『楽園への道 (El paraíso en la otra esquina)』と、その旺盛な創作への取り組みは些かの衰えも見せていない。

2006年に発表された『バッドガールのいたずら (Travesuras de una niña mala)』が、現時点での最新作となる。そこではバルガス＝リョサ本人にきわめて近い主人公が、少年期から1980年代末に至るまで、1人の女性に翻弄され続けた半生が描かれている。フランス国籍を取得し、ユネスコの通訳・翻訳官として働く傍ら、ロシア文学の翻訳などもやっている主人公は、バルガス＝リョサが創造した、物語の中を生きるもう1人の自分である。彼は思春期に入りかけていた1950年の夏に、リマで1人の少女に初恋をし、苦い失恋を味わうのであるが、

その後 1960 年代のバリ、1970 年代のロンドン、東京、1980 年代のバリ、マドリードで繰り返しこの運命の女性と再会し、その度に手ひどい仕打ちを受けることになる。この作品の面白さは、各年代の世相が物語の一部として重要な役割を果たしている点で、その最後に、作者が大統領選出馬を決意するきっかけとなった 1980 年代後半の、混乱を極めたガルシア政権下のペルーが現れるのは示唆的である。バルガス＝リョサの分身たる主人公は、祖国の将来に何の明るい展望も見出せないまま、作中に取り残されてしまうのだ。

現実世界のバルガス＝リョサがこの作品を世に出した 2006 年、祖国ペルーは大統領選の直中であつた。2000 年の選挙で憲法を拡大解釈し、強引に 3 期目を目指したフジモリは、当選はしたもの、直後から様々な不正疑惑が噴出したため、外遊先の日本から国会へ辞表を送ると、そのまま亡命生活に入った（辞表は受理されず、逆に議会はフジモリの罷免を決議した）。翌年国民の大きな期待を受けて大統領に就いたのがトレドであつたが、5 年の任期中さしたる実績を上げられないままその座を後にすることになる。そして迎えた 2006 年の選挙で決戦投票に残ったのは、元陸軍中佐で、ベネズエラのチャベス同様、強硬な反米姿勢をとるウマラと、かつてペルーを混乱の極みに陥れ、その後長く亡命生活を送っていたガルシア元大統領だったのである⁵⁾。国民はどちらがより良いか、ではなく、どちらがまだましかの選択を迫られ、結局ガルシアが再選を果たしたのである。天職を投げうってガルシア批判の急先鋒に立ったバルガス＝リョサの胸中はいかばかりであつたろうか。

おわりに

1959 年の革命以来半世紀近くにわたったカストロ政権の終わりが近づきつつある一方で、1999 年に大統領の座に就いたベネズエラのチャベスは、豊富な石油資源の力を後ろ楯に反米姿勢を鮮明に打ち出し、今や非同盟諸国のリーダーとしてカストロの後継者を任じている。ボリビアのモラレス政権、エクアドルのコレア政権と、反米左派政権の誕生が続き、ニカラグアでサンディニスタ革命の指導者であつたオルテガ元大統領が 16 年ぶりに再選を果たした背景には、アメリカ一極中心のグローバル化の流れの中で、新自由主義政策の押しつけによって、貧富の格差が一層拡大していることへの国民の強い不満の声がある。かつて銀行国有化に反対し、規制緩和と市場原理の重要性を主張したバルガス＝リョサは、文化面でのグローバル化に対してさえ保護主義を否定し、真に価値のある文化であれば保護がなくても生き残っていくはずだと断じていた (*Desafíos a la libertad*, pp.265-270)。

しかし、2001 年の 9.11 以降の世界の動きを見るかぎり、アメリカ的価値観を土台とするグローバル化の流れが修正を余儀なくされているのは明らかである。かつて、ひとつの価値観に縛られることの危険性と、重層的な視点に立つことの重要性を訴えていたバルガス＝リョサであるが、今後新自由主義の呪縛から逃れ、新たな方向性を示すときがやってくるであろうか。

祖国ペルーへの思いを「癒しがたい病」と表現していた彼は、70歳を越えて、若い頃のようにした恋愛感情にも似た情熱を、すっかり失ってしまったようにも見受けられる。彼にとって、ガルシアを再び大統領に選んだ祖国は、散々彼を翻弄し続けた「バッドガール」そのものなのではないか。繰り返し裏切られながらも、最後まで「バッドガール」への思いを断ち切れなかった小説中のもう1人の自分は、彼女の最期を、恨むことなく静かに看取ってやるのだが、現実のバルガス＝リヨサも、似たような思いで祖国を見つめているような気がしてならない。

注

- 1) 独裁政権下において非合法化されていたペルー共産党「カウイデ」の地下活動への参加は、『ラ・カテドラルでの対話』における作者の分身の登場人物サンティアゴのエピソードとして描かれている。しかし実際にマルクス主義関連の基本図書を広く系統的に読んだのは、1960年代にパリで自主的亡命生活を送るようになってからであった（*El Pez en el agua*, p.250）。
- 2) バルガス＝リヨサの作品に見られるメタフィクション性については、拙論「バルガス＝リヨサの3つの戯曲作品について」（『福岡大学総合研究所報』第121号、1990）、および「バルガス＝リヨサの『マイタの物語』におけるメタフィクション性」（『HISPANICA』第35号、日本イスパニヤ学会、1991）において論じた。
- 3) 前任は70歳台半ばのイギリスの作家ヴィクター・プリチェットだったので、大幅な若返りとなった。1979年には国際交流基金の招きで初来日し、大江健三郎、山口昌男らとの対談などを行っている。
- 4) その後1992年には軍の協力を得て、憲法停止という非常手段に打って出たが、国際世論の強い批判とは裏腹に、多くの国民はこうした上からのクーデターを容認した。再選を可能にした新憲法の下、1995年の選挙でフジモリは、圧倒的な支持を得て再選を果たしたのである。
- 5) フジモリもこの選挙への出馬を念頭に、2005年11月に日本からチリへ移り、同国の警察当局に拘束された。彼の立候補届けはペルー選管に却下され、その身柄は2007年9月にペルー当局に引き渡された。12月には職権乱用の罪で禁固6年の有罪判決が下され、引き続き民間人殺害への関与をめぐる最高裁での審理が行われている。

参考文献

Vargas Llosa, Mario,

- Contra viento y marea I (1962-1972)*, Barcelona, Seix Barral, 1986
Contra viento y marea II (1972-1983), Barcelona, Seix Barral, 1986
Contra viento y marea III (1964-1988), Barcelona, Seix Barral, 1990
Desafíos a la libertad, Madrid, Ediciones El País, 1994
García Márquez: Historia de un deicidio, Barcelona, Barral, 1971
El lenguaje de la pasión, Madrid, El País Grupo Santillana, 2001
Literatura y política, Madrid, Fondo de Cultura Economica de España, 2003
El pez en el agua, Barcelona, Seix Barral, 1993,

大江健三郎『大江健三郎往復書簡』朝日新聞社、2003年

J.P. サルトル、加藤周一、白井健三郎、海老坂武訳、『文学とは何か（改訳新装）』、人文書院、1998年

村上勇介『フジモリ時代のペルー』平凡社、2004年

『ユリイカ（特集バルガス＝リヨサ）』第22巻、第4号、青土社、1990年

本文中で言及したバルガス＝リョサの小説の邦訳一覧 (原作発表年代順)

『都会と犬ども』 杉山晃訳, 新潮社, 1987 年

『緑の家』 木村榮一訳, 新潮社, 1981 年

『ラ・カテドラルでの対話』 桑名一博, 野谷文昭訳, 集英社, 1979 年

『パンタレオン大尉と女たち』 高見英一訳, 新潮社, 1986 年

『フリアとシナリオライター』 野谷文昭訳, 国書刊行会, 2004 年

『世界終末戦争』 且敬介訳, 新潮社, 1988 年

『誰がパロミーノ・モレロを殺したのか』 鼓直訳, 現代企画室, 1992 年

『密林の語り部』 西村英一郎訳, 新潮社, 1994 年

『継母礼讃』 西村英一郎訳, 福武書店, 1990 年

『官能の夢ードン・リゴベルトの手帖』 西村英一郎訳, マガジンハウス, 1999 年

『楽園への道』 田村さと子訳, 河出書房新社, 2008 年 (刊行予定)